

ブルンジ初渡航

ブルンジ国稲作改善支援計画プロジェクトに参加することになり、2024年5月半ばから1.5か月間、初めてブルンジに渡航する機会を得た。

ブルンジは東アフリカの内陸国で、北はルワンダ、東と南はタンザニア、西をコンゴ民主共和国と国境を接している。近隣のルワンダやウガンダと同様に標高が高く、大部分が1500m以上であり山地、丘陵地、台地で占められるが、国の西南部はアフリカ大陸で2番目に大きい湖、タンガニーカ湖に接しており、湖畔に沿うように狭いながらもインボ平地が南北に伸びている。首都のギテガは中央高地にあるが、経済の中心地のブジュンブラはタンガニーカ湖の最北端に面した街だ。

プロジェクトはブジュンブラ近郊のインボ地方灌漑公社（SRDI）管轄下の灌漑地区のコメ生産の向上を目指したもので、種子品質の向上、栽培技術の向上、精米技術の向上を目指して活動している。ブルンジは伝統的にはバナナやイモ類が主食であるが、1980年代からコメが日常の主食として普及した。生産量は90年代の年間4万トンから、2011年には8万トンまで増加したが、消費量も増加し、近年は1万2千トン前後を輸入している。1993年の内戦ぶっ発以降、自給を達成していた食料生産の状況は悪化し、その後も、2015年のクーデター未遂事件や2020年からのコロナ禍の影響で経済は安定せず、食料供給を援助や輸入にたよる状況が続いている。コメの生産向上は経済発展に寄与することが期待される。

渡航した5月末は、収穫期も終盤であったが、一部農家の農家圃場で調査を行うことができた。調査の結果、品種の純度を示す異株率が10パーセント弱と高く、品質面での問題があったが、収量は平均で5t/haほどあり、生産性は意外に高かった。インボ灌漑地区の農民は、高地からの入植

者が中心であるため伝統的な農村より、SRDIの管轄下の農家組合の組織化が徹底しており、品種の選択や肥料の施用などに関する指導が行き渡りやすいのかもしれない。農家も真面目な人が多く、今後、種子の純度を高め、除草や施肥時期などの改善点をさらに、徹底していけば品質と収量を高めることは可能ではないかと考えられた。

ブルンジは2023年の国民総所得が230ドルとアフリカでも最貧の国である。筆者の滞在期間中は、ガソリン不足で、給油所の前に車の行列が見られたり、バスの運行が減少し、多くの人が徒歩で通勤する様子がみられたりした。また、近年は気候変動の影響か、タンガニーカ湖の水位が上昇しており、湖岸の道路が水没している様子も見た。洪水被害にあった集落も多いようだ。経済的にも自然環境的にも人々の暮らしは厳しい側面があるが、ブルンジの人々は温厚で、街の雰囲気も穏やかに感じられた。商店に行くと輸入品などはかなり高い印象だが、野菜や果物は豊富で、マンゴーやミカンなど旬の果物はおいしかった。他にも、サンマのようなムケケ、白身のサンガラ、トマト煮で美味しい小魚のンダガラなどタンガニーカ湖の魚やバランスの良いブルンジ・コーヒーの味はぜひまた味わいたいとおもえるもので、次回の渡航が楽しみな国である。（2024年11月小島）



調査圃場の隣で収穫する農家



タンガニーカ湖の魚、ムケケ